

ユング心理学における老賢者（オールド ワイズマン）と太母（グレートマザー）

—— 河合隼雄先生との縁（えにし）を回顧して ——

心理学科 鳥山平三

抄録：我が国の臨床心理学界の第一人者で、長く斯界（しかい）の先頭に立って導いて来られた河合隼雄先生が亡くなった。先生は20世紀最後の「老賢者」の一人と言ってもよい。筆者は、先生に特に近い存在ではなかったが、それでも40年に及ぶ浅からぬ交流があった。その出会いから、折々のエピソードを追想することにより、河合先生を偲ぶよがとしたく思う。筆者の個人的な臨床心理学研鑽の経験の織りなす、河合先生の周囲の人との交流の中に、河合先生を慕う女性と男性のさまざまな人間模様が興味深く観察された。そこで、河合先生もよく触れておられたユング心理学の「元型」の中でも、現代における「老賢者」の失墜（しっつい）、そして、否定的な意味での「太母」の籠絡（ろうらく）について、見解を述べたく思う。時代は「老賢者」の英知から「太母」の呪縛へと移り行く現代である。

キーワード：河合隼雄先生、ユング心理学、元型、老賢者、太母

1. 河合隼雄先生との出会いと交流

(1) 河合隼雄先生の生涯

河合隼雄先生は、1928年（昭和3年）6月23日に兵庫県篠山町（現丹波篠山市）に生まれ、2006年の夏、脳梗塞（のうこうそく）で倒れられ、約1年の闘病の後、2007年（平成19年）7月19日に逝去（せいきょ）された。享年（きょうねん）79歳だった。最後の要職は文化庁長官だった。

河合先生は、1952年3月、京都大学理学部数学科を卒業し、奈良県で高校教員をされていた。その後、心理学に関心を持ち、京都大学大学院文学研究科に進学され、教育心理学の研鑽（けんさん）を積まれた。そして、1955年に天理大学に就職され、教職課程の講義「教育心理学」の担当と学生相談カウンセラーを務められた。1959年から1961年まで米国カリフォルニア大学に留学して、クロッパー（Klopfer, B.）やシュピーゲル

マン（Spiegelman, J. M.）に師事され、ロール・シャッハ・テスト技法の研修とユング派の教育分析を受けられた。一旦帰国して天理大学にもどり、翌年1962年からスイスのチューリッヒ市にある「ユング分析心理学研究所」に留学し、マイヤー（Meier, C. A.）らに師事された。そして、1965年に日本人として初めて「ユング派分析家資格」を取得して帰国された。

帰国後の最初の講義が、京都大学大学院文学研究科で行われた。私は当時、大学院修士課程心理学専攻に入学したばかりであったが、その講義を興味深く受講した。その講義ノートが推敲（すいこう）・編集されて出版されたのが『ユング心理学入門』（培風館、1967）である。その後、河合先生は天理大学教授から、1972年4月に、京都大学教育学部助教授に転身され、1975年1月に、教授に昇格された。その後、教育学部長や学生部長を務め、1992年3月に満63歳で定年退官され

た。そして、京都市西郊にある国立国際日本文化研究センターに移り、教授となり、それから、初代の梅原 猛先生に次いで二代目の所長を務め、2002年1月18日に、文化庁長官に就任された。

また、「日本心理臨床学会」や「日本箱庭療法学会」の設立に尽力された。さらに、「日本臨床心理士資格認定協会」を立ち上げ、1989年に発足した「日本臨床心理士会」の初代会長になられた。

(2) 河合隼雄先生との出会い

河合先生との最初の出会いは、上にも述べたように、私が大学院生の時の1965年だった。その時は、私もまだただの受講生としてだけの関係であった。講義室はもう今は文学部の第8番教室だった。講義が始まる時、河合先生はいつも数名の男女に伴われてぞろぞろと現れ、その男女は最前列に席を占め、そのうちの1人が当時は大きくて重いテープレコーダーを常に持参てきて、電源をつなぎ毎回講義を録音していたのが印象的だった。その頃、京都大学文学部には、古代哲学史の田中美知太郎教授（ギリシャ哲学）、中世哲学史の高田三郎教授（スコラ哲学）、近世哲学史の西谷啓治教授（実存哲学）、哲学の野田又男教授（ドイツ観念論）、東洋哲学史の松尾義海教授（インド哲学）、倫理学の島 芳夫教授（カント哲学）、中国哲学史の重澤俊郎教授（儒教思想）、宗教学の武内義範教授、仏教学の長尾雅人教授、キリスト教学の有賀鐵太郎教授、心理学の園原太郎教授（認知の発達心理学）、社会学の臼井二尚教授、美学美術史の井島 勉教授、国文学の遠藤嘉基教授（日本語文法）、中国文学の小川 環教授（湯川秀樹博士の実弟）、英文学の中西信太郎教授（シェークスピアの研究）、アメリカ文学の菅 泰男教授、フランス文学の伊吹武彦教授（フローベールの研究）、ドイツ文学の大山定一教授（ゲーテの研究）、イタリア文学の野上素一教授（母親は文学者の野上弥生子さん、ダンテの研究）、西洋

古典文学の松平千秋教授（ホメロス研究）、そして、人文科学研究所所属で中国文学の吉川幸次郎教授（漢詩の研究）、フランス文学の桑原武夫教授（ルソーの研究）、東洋史学の貝塚茂樹教授（湯川秀樹博士の実弟）といった、高名で錚々（そうそう）たる学者が教壇に立っておられた。まさに、この先生がたこそ今はなき、我が国の誇る「老賢者」の顔ぶれであった。私はそのすべての講義を受講したが、その場に誰1人としてお付きの人たちがいるとか、講義内容をテープレコーダーで録音するという人もいなかった。それだけに河合先生の毎回の講義の際の講義室の異様な光景には、のっけから呆気（あっけ）にとられた思いが記憶に残っている。もうすでに河合先生は「人気者」なのだな、と思わされた。

それはともかく、河合先生との二度目の出会いは翌年1966年の夏だった。私は修士論文を書くべくアンケートと質問紙法性格検査を使った調査の被験者を探していた。私の指導教授だった園原太郎先生（故人）の紹介で、天理大学の河合先生に会うことになった。私は京都駅から近鉄電車に乗り、はるばると初めて行く天理駅に降り立つと、改札口に河合先生が待っておられて、自転車を押して、田結庄（たいのしょう）にある体育学部のキャンパスに案内して下さった。そして、そこで授業をされている「教育心理学」の講義の時間を1コマ提供して下さった。100人を超える受講生だったと思うが、首尾良くデータを採ることができた。その日はそれだけでお別れした。

その後、私は修士論文のテーマとして「神経症についての研究—特に、宗教心理学的観点から—」という課題を進行させたいと思い、河合先生に直接神経症の患者と出会う機会はないものかと相談したところ、「京都市の知恩院境内にある相談室に毎週行っているので、そこで会いましょう」と言って下さった。その相談室を訪ねて、いろいろと話を伺っているうちに、どういう理論に興味があるかと問われて、私はフランクル（Frankl, V. E.）

の「実存分析」（ロゴテラピーや「意味への意志」に心を導く精神療法），と「森田療法」に惹（ひ）かれると答えたと記憶している。すると、ユング派の河合先生はあまり賛同できないような口吻（こうふん）を漏らされたことを覚えている。ともあれ、京都市内にある「森田療法」の専門病院の「三聖病院」の院長宇佐晋一先生を紹介して下さった。私は九条通り東にある「三聖病院」を訪ねて、河合先生からの紹介状を宇佐先生に手渡した。それから約半年、「三聖病院」に通い、「森田療法」の歴史や手法について、お話を伺ったり、出版物を頂いたり、入院患者に質問紙法テストをさせてもらったり、院長の「講話」に参列させてもらったり、東福寺の塔中（たっちゅう、塔頭とも書く）で開かれる退院者の会にも参加させてもらい、その場の人たちにインタビューすることも許可してもらった。これほど密度の濃い臨床現場での新鮮で豊富な経験は、私の生涯でその後得られることはなかった。本当に、河合先生のお陰と感謝している。

無事、修士論文を完成させ、当時は青焼きの分厚いコピーを河合先生と宇佐院長にお届けしてお礼を言った。その4月に、私は希望通り博士課程に進学することができた。

（3）河合先生との交流

私は大学院に進学して以降、心理学科共同研究室で学部生・院生合同で「臨床心理学研究会」を定期的に開催していたが、そのテーマの1つとして「ロールシャッハ・テスト」を取り上げた。先輩たちの参加も得て、図版の条件をいろいろ変えて（たとえば、図版から色を抜いたり、濃淡を省いて黒一色にしたり、輪郭線のみにしたり、といった改変を行った）同じ反応が得られるかどうかを実験的に検証するという研究で、日本心理学会で連続共同発表を続けていた。大学生と小・中・高校生を被験者としての実験結果の大要は、反応としての「内容」は、もう「場所」と「決定因」

もほとんど形態という要因に左右されて、色彩や濃淡はあまり関係がないというようなものだった。残念ながらさほど意味のある研究とは思われなかつた。しかし、その講評を得たいと思い河合先生を招いて、研究会主催の「ロールシャッハ・テスト・セミナー」を開こうということになった。お忙しい中を、河合先生に快諾を得て、共同研究室に来てもらい、1日講習会を担当して下さった。その時のテキストは、クロッパー著・河合先生訳の『ロールシャッハ・テクニック入門』（ダイヤモンド社）だった。明快でわかりやすく、図版のプロトコルの解釈やスコアリングに非常に役立ち、今なおマニュアルとして手元に置いて活用している。

私は、1970年3月、大学院博士課程を単位取得満期退学して、その12月に新しく開設された洛北は松ヶ崎にある国立の京都工芸繊維大学保健管理センター（学長直属の独立部局）の専任講師・カウンセラーに採用された。その同じ国立大学の学生相談カウンセラーたちが集う、毎年1月の成人の日前後に各大学持ち回り開催の、文部省厚生補導特別企画「全国大学学生相談研究会議シンポジウム」（通称、「成人の日シンポ」）というものがあり、私はほぼ毎回参加していた。その会が広島大学の当番で、現在主キャンパスとなっている東広島市の西条共同研修センターで二泊三日の合宿形式でシンポジウムが行われた。1974年のことだったと思われるが、京都大学教育学部に移られたばかりの河合先生も参加されていて、新天地で中堅助教授として張り切っておられた。昼休みにまだ雪の残るグラウンドでソフトボールすることになったが、先生の投げるボールに私は凡打、しかし、先生は私の投げるボールを見事に外野を越えるホームランにされた。今なお鮮やかに記憶に蘇（よみがえ）ってくる（これは、「夢」かな？！）。その合宿セミナーにはその後も毎回ではなかったが河合先生も何度か参加され、夜の飲み会の席で「私は丹波篠山の山猿だ」と言って、よく大声で愉快そうに「デカンショ節」を歌われ

ていた。目立ちたがり屋の河合先生は何でも芸達者な先生だった。

(4) ユング心理学への導き

私が学生相談カウンセラーになって7年目、1977年、当時の学長に仕事ぶりを認められ、その推薦で、その年の「文部省在外研究員」に大学から1人選ばれた。期間は丸1年ということで、少し中途半端な研鑽になると思ったが、申請書には「ユング分析心理学研究所」における講座への出席と教育分析体験という研修内容を記載した。その2年前から、将来の希望もあり京都ゲーテ・インスティテュートに週2回仕事を終えての夜の授業に通ってドイツ語会話を習い、また、松ヶ崎の大学の近くでささやかに教室を開いている京都大学のアメリカ人研究者に週1回英会話のレッスンを受けてはいたが、一向に上達はせず自信も持てずで、思ったより早いチャンスの到来で、うれしい半面いささか困ったことになったと戸惑いを語ったところ、河合先生は「とにかく、一回行って来たらいい」と言って下さった。研究所に入門するためには、2通の推薦状が必要だったが、その1通を河合先生が書いて下さり、もう1通は所属大学の学長に頼み、私が英作文したものに署名してもらった。そうこうして、あわただしく、妻と幼い2人の子どもは残して、1978年（昭和53年）3月10日、大阪空港から羽田空港を経て日本航空のDC8型機で日本を出発した。

当時はソヴィエト連邦のシベリア上空を飛行して、シェレメチエボ空港に一旦着陸した後、西ドイツのフランクフルト空港に到着した。そこで、スイス航空の便に乗り換え、チューリッヒ空港に夜到着した。リムジンバスでチューリッヒ駅へ、そこからタクシーでホテル・アンバサダーにチェックインと、慣れないことばかりでひやひやして大変疲れた。

4月の開講までは、研究所への登録手続きとアパート探しと下宿生活の必要物品をそろえるのに

大忙しだった。チューリッヒは3月末でもまだ寒く、街のあちらこちらに残雪が見られるのが印象的だった。「研究所にはもういないが、元秘書で日本人にとても親切な女性でバウマンさん（Baumann, Hedda, 故人）という人がいるので、一度会ってみるといい」と、河合先生から紹介されていたので、電話で面会を求め研究所でお会いした。お会いしてみると、バウマンさんはもう60代半ばは越していると思われたが、しかし、まだまだ元気でバイタリティーのある女性だった。そのバウマンさんには、本当にいろいろとお世話になった。彼女の運転でチューリッヒ郊外にドライブに連れて行ってもらったり、後で述べる日本人精神科医たちを交えて食事会に自宅へ招いて下さったこともある。その自宅で、ユングの英語文献の輪読のお相手もして下さった。独身で寂しい老後を過ごしておられたので、単身赴任の私には本当によきサポーターであり、英語の話相手だった。一度、日本にも来られた時は、京都市内を案内したこともあり、2002年に亡くなるまで毎年ドイツ語で手紙やクリスマス・カードのやりとりがあった。

さて、4月になってユング研究所でも新学期が始まったので早速行ってみることにした。私が住んでいたチューリッヒ湖岸のデュフーラ・シュトラーセ（Dufour Strasse）の下宿のアパートから歩いても20分ほどで当時市内のゲマインデ・シュトラーセ（Gemeinde Strasse）にあった研究所（ユングも大変気に入っていた）に行けた（1980年から現在は、研究所の建物は、チューリッヒ市郊外の湖畔キュスナハト Kuesnacht に移っている。新しい研究所にはもうユングの魂がいなくなってしまった！と嘆かれている）。間もなくのウェルカム・パーティーで、やはり研究所の研究生となつた4人の若手精神科医の皆さんと初めて会うことができた。すなわち、織田尚生（たかお）さん（家族同伴で、当時、鳥取大学医学部講師、2年して一旦帰国、その後2年後、再びスイスへ、そし

て、2年して日本人精神科医としては初めてユング派分析家資格取得、帰国後は、放送大学、甲南大学、そして、東洋英和女学院大学教授、2007年死去)、岩堀武司さん(家族同伴で2年滞在、当時、大阪府堺市にあった医療刑務所主任医務官、その後、法務省矯正局医療分類課課長、現在、八王子医療刑務所所長)、小林勝司さん(家族同伴で2年滞在、栃木県小山市の病院精神科医師、現在、小山富士見台病院院长)、そして、小野従道(じゅうどう)さん(2年滞在、当時、愛媛大学医学部助手、その後、愛媛大学保健管理センター助教授、滋賀県精神保健福祉センター所長、1997年死去、妻の小野けい子さんは、臨床心理学専攻で、愛媛県内の短大・大学に勤めた後、東京国際大学教授、そして、現在、放送大学大学院教授)たちだった。その他に、すでに1年前から大阪藍野病院セラピストで臨床心理学専攻の後藤佳珠(かず)さんが学んでいた。そして、もう1人、チューリッヒ大学で哲学・宗教学を学んでいたまだ若い山本淳さん(帰国後、豊橋技術工科大学助教授、現在教授)という人とも知り合った。私を含めて、この7人で、河合先生推薦のユングの著作『変容の象徴』(Transformation of Symbols)を、英語訳とドイツ語原書で輪読会を、織田さんの住むアパートですることになった。

研究所で毎日開講されている講義は、ユング理論についてさほど詳しくもなく、また、前勉強もあまりせずに臨んだ私にとっては、とても難解で、英語のリスニング能力の限界もあり残念ながら歯が立たなかった。ここへ来る前に、河合先生のように、まず、アメリカかイギリスといった英語文化圏に留学経験をして、その後ユング理論を学んでやって来るべきだったと悔やんだものである。研究所では、講義についてのテキストもなく、資料のプリントも配られなかったので、予習も復習もできず、内容は消化不良のままどんどん進んで行き、時折講師が受講生に質問をする時などは、心臓がどきどきで一度当てられて往生したことが

あった。それでもめげずに最後まで受講したが、試験もなくレポート提出もなく、結果的に単位の認定も何もなかった。

もう1件は教育分析の分析家探しだった。チューリッヒ市内で開業している分析家のリストを渡され、そこから自分で連絡して分析家との契約を結ばなければならなかった。それについては河合先生からあらかじめ特に誰がいいと紹介してもらっては来なかったので、私には全く手がかりがなく、リストの中からアパートに近くで通いやすい英語を話す分析家を選んだ。それがヒルさん(Hill, John F.)だった。年齢は私と同じくらいで、長身のひげをはやしたアイルランド人で、古代ケルト文化とユングの言語連想法を研究しているということだった。ヒルさんが、最初、なぜ自分を選んだのかと問うので、上に述べた理由を告げると、大きな目を見開いて不快そうな表情をされたのを覚えている。ともあれ、分析を受けることになり、朝目覚める前に、夢を見たなと思うと枕元で急いで書き留め、英文に翻訳し、当時はタイプライターしかなくて、スイスで買い求めた“Baby”というコンパクトなタイプライターで原稿打ちをして、それをコピーして持参し、ヒルさんのところへ週2回訪問した。私の会話力の限界で、ヒルさんの質問にもうまく答えられず、ヒルさんが以前に分析した日本人の安渢(あんけい)真一さん(精神科医、故人)とはもっとうまくやりとりができると嫌(いや)みを言われた。ずいぶん落ち込んで心が塞(ふさ)いだが、やるしかないと心に決めて、夏期休暇前に25回、そして、秋以降にも25回分析を受けた。秋になってやはり気持ちが塞ぐので、バウマンさんに相談したところ、もう1人別の分析家につくのもいいだろうと勧められ、小林勝司さんの分析家でもあった、まだ30代の若いスイス人女性分析家のバウムガルトさん(Baumgart, Ursula)を紹介してもらった。それで週1回はヒルさんと、そして、もう1回はバウムガルトさんと並行して教育分析を受けること

になった。バウムガルトさんのスイス人の英語はよくわかり、また、彼女は日本文化にも親しんでいたこともあり、毎回の分析は非常にわかりやすいものだった。もっと続けたかったが、17回受けたところで1979年3月の帰国の時が来てしまった。

帰国までに、ロンドン大学、ミュンヘン大学、そして、ウイーン大学のそれぞれの心理学教室を訪問して、「青年の死に対する態度」についての英・独語による調査を依頼して、実施後、私の大学宛に送付してもらうようお願いした。その後、届いたその調査結果をまとめて、一部を1984年に、メキシコのアカプルコ市で開催の「第33回国際心理学会議」で発表した。

後日談であるが、バウマンさんとバウムガルトさんには、私が翌年の1980年、スイスに短期滞在した時に、表敬訪問して再会することができた。ヒルさんは、1990年に、先に述べた安渢さんが世話を、京都でセミナーが開かれた折りに再会して、私の運転で、当時私の勤務大学であった京都工芸繊維大学保健管理センターの相談室に案内し、その後、「大原三千院」に行き習字を体験してもらい、また、「宝ヶ池公園」の池の周りを散策し、終わりは「下鴨茶寮（しもがもさりょう）」という料亭で京料理と抹茶（まっちゃん）をご馳走（ちそう）した。

(5) ユング心理学との別れ

1980年になって、上に述べた精神科医の4人が相次いで帰国したのを待って、河合先生は、京都で「夢の会」という研究会を開かれていた。参加者はその4人と、樋口和彦さん、山中康裕さん、鈴木茂子さん（故人）、そして、横山 博さんという精神科医だったように思う。私は、初め、声を掛けてもらえなかったのだが、精神科医の皆さんに勧められて河合先生に直談判（じかだんばん）をして、参加させてもらうことになった。岡崎公園の疎水畔にあったかつての医学部の芝蘭（しらん）会館がその席で、ケース研究の発表が順繰りにあり、箱庭療法の作品のスライドが映されたり、クライエントの夢分析の経過が報告されたりと、非常にレベルの高いものだった。1度は、銀閣寺近くの橋本関雪画伯の遺邸で、「白沙村荘」（はくさらそんそう）という（当主は関雪の孫の橋本帰一君といって、私とは文学部の同窓で哲学科美学美術史専攻卒業で親しかった。故人）一般に公開されている名園で、食事を兼ねて開かれたこともある。しかし、岩堀さんが東京に転勤になり、小林さんも栃木県に定住し、織田さんが再度スイスに行くということになり、「夢の会」は自然消滅してしまった。

その頃、私は、織田さんに託されて、ユング（Jung, Carl Gustav, 1875-1961）の高弟ハーディング（Harding, M. Esther）の『心的エネルギー：その源泉と変容（上・下）』の翻訳を数人の織田門下の人たちと進行させ原稿をすべて私が推敲して、人文書院から2冊本として刊行した。そして、次に、後藤さんからも共訳を頼まれ、やはりユングの高弟のハナー（Hannah, Barbara）の『評伝 ユング：生涯と業績（I・II）』の2冊本と、フォン・フランツ（von Franz, Marie-Louise）の『おとぎ話と個性化』を、共にやはり私が推敲作業をして人文書院から出版した。しかし、ユング心理学との深い関わりは、なぜかそれで終わってしまった。

余談であるが、関西カウンセリング・センターのセミナーに招かれた目幸黙遷（みゆきもくせん）先生を河合先生から紹介され、1984年にアカプルコ市で開催された「国際心理学会議」の帰路ロスアンゼルスに立ち寄り、勤務されていたカリフォルニア大学ノースリッジ校を案内してもらったり、同じ大学の社会学者の伊賀 衛（いがまるる）先生を紹介してもらったりした。その伊賀先生のご案内で、有名な「自殺予防センター」（Prevention Center of Self-destructive Behavior, Los Angeles）へ連れて行って頂き、著名な

シュナайдマン（Shneidman, E. S.）博士とも面談することができた。大変な光栄に浴した次第である。

(6) イベントでの出会い

私は、「箱庭療法」には一応興味を持って、講習会やセミナーにも何度か参加して研修を受け、実際に大学の学生相談室や非常勤の嘱託をしていた京都市児童院児童相談所の児童のケースにも活用していたが、今ひとつじっくりと取り組みたいとは思わなかった。カウンセリングの流れに援用することには意味があるが、その解釈があまりにも恣意（しい）的で牽強付会（けんきょうふかい）だという懸念を抱いていたからであった。今なおそう思っているし、カウンセリングの導入や補助作業のひとつとして利用するのは、大いに賛成である。その考えもあって、「日本箱庭療法学会」には入会していない。

こうした私の個人的立場というか考え方もあるて、1980年代後半以降は、河合先生との関係はだんだんと疎遠（そえん）なものとなっていました。それでその後お会いしたのは、たまたまこのイベントの機会のみであった。

1990年に「第22回 国際応用心理学会議」が京都で開催された折り、実行委員であった私も一員として、その前座のワークショップの一部会として河合先生に「箱庭療法セミナー」の主催を依頼して、京大会館で講師をしてもらった時にお会いした。その後、主会場の国立京都国際会館での園遊会（reception party）にも出ておられた河合先生と同行の大塚義孝さんにも、偶然出会ったことがある。

その次は、私が1996年に天理大学に転身したその年、天理大学が当番会場になって「日本箱庭療法学会第10回大会」が開催された時、シンポジウムの司会を当時同僚の森岡正芳さん（その後、奈良女子大学に移り、2007年より神戸大学大学院教授）と受け持ち、シンポジストとして河合先

生他をお招きしたことがある。そして、その夜の祝宴で私がシンポジウム主催者として、河合先生に出演料をお渡しするというエピソードもあった。

最後の直接の出会いは、1999年だったと思われるが、天理大学教養部に就職されたA先生が京都文教大学のB先生と結婚され、その祝賀披露宴が京都の烏丸通りにあるホテルで催された時である。宴もたけなわとなって、参加された人たちの隠し芸大会になり、フラメンコを踊る川崎佳子さんやご機嫌の河合先生のお得意のフルート演奏があり、そして、主役のA先生御夫妻のピアノの連弾で幕となった。

このように、河合先生との縁（えにし）をたどってみると、身近に感じたこともあったが、結局先生の周辺部に留まるしかなかったような気がする。その理由は、考えてみると、ひとつには河合先生はユング心理学の「集合的無意識」（河合先生は、「普遍的無意識」と訳されていた）に強く惹かれて、神話や伝承の研究に深く入って行かれたのに對して、私はどちらかというとユングの「個人的無意識」の理解より進まず、その深層分析的でバランス感覚に富んだ人格の捉え方に魅力を感じていたことであろうか。そして、噂だけかも知れないが、生前のユングがナチスのヒトラー（Hitler, A.）を、ゲルマン神話の最高神ヴォータン（Wotan）と同一視して、支持・同調したのではないかと、秘かに語られるに似て、ユング派の河合先生もいわば神話好きのナショナリスト（国家・民族主義者）という側面があるのではないかと危惧（きぐ）して、私は遠のいたのかもしれない。神話や伝説で語られる伝承事を、象徴やイメージとして比喩や類比に活用することはよしとして、真に受けるのは時代錯誤で歴史を逆行させる危険性があると僭越（せんえつ）ながら思う次第である。そして、オカルト（occult）に親近感を抱くユングの心性や理論が、「トランスペーパーソナル心理学」（transpersonal psychology）や胡散臭（うさんくさ）まで世間を惑わすカルト（cult）教団の流

行を促したのではないかと懸念しているのも事実である。

それに加えてもう一つユングに対する拒否反応を否定できないことを知ったからである。研究所に通っていた時に、バウマンさんや講師からも聞かされたことであるが、ユング心理学は無意識の声に従う触媒のようなもので、“家庭破壊の心理学”だと揶揄されていたからである。ユング自身も妻のエンマ（Emma, 1882–1955）を嘆かせたことに、「ユングの患者の若い女性たちは一人残らず彼に恋をする」といったように、女性の患者や弟子たちとの間に踏み越えてはならない一線を越えたことがあったようである。はっきりとしているものとしては、トニー・ウォルフ（Toni Wolff）との関係であり、若い頃のロシアのユダヤ人女子医学生のザビーナ・シュピールライン（Sabina Spielrein, 1885–1937?）との情交である（Hannah, 1976）。

さて、河合先生のお考えに対して、もとより私には誤解や理解不十分さが大きいにあるかもしれないが、そこに溝が生じる理由があったのだろうと思う。遅ればせながら、今後とも、河合先生の遺徳を偲びつつ、まだまだたどり着けない奥深いユングの思想の真髄を、現実の社会現象に対応させて追究して行きたいと思っている。

2. 現代と「老賢者」

(1) 「老賢者」とは

「老賢者」（old wise man）とは、ユング心理学における「元型」（archetype）【注①】のひとつである。その意味するところは、無意識下にある父親の像である。それは、偉大な父なるもののイメージで、男性にとっては成長の究極的な目標とされるものである。そして、多くの場合、我々の心の中にある「神」のイメージに近くて、英知と指導力の象徴であり、男性性の発達の最終段階と言われるものである。それは、力や理性などを

持ち合わせている完成した人間のイメージとなる。そこから、「知恵の導師」とも言われる。

要するに、「老賢者」は強くて賢い父や祖父のようなものである。従って、大いなる父性の顕現としてその支配力は絶対的なものとして現れる。老練な理知の力で、我々を正しい場所に導く力を持っていると言われる。そこから、当人の資質や性格はともかく、信者にとっては「老賢者」は実体化した存在であり、盲目的に信頼し崇拝する対象となる。

たとえば、古代のイスラエルの民を率いたモーゼ（Moses）は、その典型的な姿と言えよう。真実は論外として、その姿を思い浮かべると、豊かな白髪と長い鬚をたくわえ、長身瘦躯（そうく）で、意志の力を表すいかめしい顔、そして、鋭い眼光の持ち主としてイメージされよう。そのイメージが多くの人たちによって共有され、無意識から語りかけてくると言える。

このように、「老賢者」は永遠の父性を表し、人々が求めて止まない「神」のイメージなのである。そして、尊敬できる人が「老賢者」を投影できる人となる。さらに、「老賢者」は、無意識の中の父親像や自分の父親的な部分を示すので、その人にとっての理想的な父親像が投影されやすくなる。そこで実の父親に投影されることで父子間に問題が発生することになる。これは特に女性と縁のある「元型」であり、女性はこの「老賢者」から「アニムス」（animus）【注②】のイメージを作り上げていくと言われている。

「老賢者」は、人々の自我に忠告を与えたり、その自我を指導したりする理性的な役割を持っていることになる。その一方で、自分自身の自我が、自分自身を見失ったり、混乱した時に、厳しく叱責する権威的で威圧的な面も持ち合わせている。つまり、「老賢者」は、自分自身を監視するという心の役割があると言えよう。

【注①】「元型」（アーキタイプ：archetype）と

は、ユングの分析心理学の重要な概念の1つである。個人の夢に、民族や国家を超えて、神話や宗教儀礼やおとぎ話などに共有されるイメージが登場することがあるが、それらは個人の心の層である「集合的無意識」(collective unconscious)にあると仮定されている。

【注②】「アニマ/アニムス」(anima/animus)とは、男性の心の内なる女性像が「アニマ」、女性の内なる男性像が「アニムス」である。どちらも「元型」から出現する心のイメージである。我々が全体性へと統合する過程としての「個性化」(individuation)にとって、これらは魂の導き手として働くと言われる。

(2) 「老賢者」の負の側面

この「老賢者」には恐ろしい一面もある。つまり、支配力が過剰になり、それが暴君として現れる場合である。賢明であるがゆえに、傲慢となり、自分に従わないものには厳しい制裁を加えるようになったり、その人の成長のためだとして、人々にむやみやたらと試練を加えることがある。これは、「老賢者」がその力の使い方がわからないために、弱者を排斥したり、意味のない虚勢をはって、他人を蹴落としてお山の大将になりたがるのである。この支配下にある弱者たちは萎縮してしまい、生き延びるために暴君に従い、間違った行為すら言われるままに実行することができる。ヒットラーやその他の歴史上の独裁者たちがそのよい例である。

上述したように、肯定的な意味では、男性にとっての「老賢者」は、心の成長を導く重要な要素となり、完成された大きな存在を目指すために、先達としての偉人や賢人をお手本とすることになる。そして、男性性に父性を加えて豊かな人格を培うことが課題として与えられる。

他方、女性の心の中にも「老賢者」は存在するが、これは自分を厳しく律し、叱ってくれる父親や師匠に投影されやすくなる。しかしながら、

女性がこれに過剰に飲み込まれてしまうと、いわゆる「父親コンプレックス」の状態になってしまい、現実の父親が持つ影響力から抜けられず、依存傾向の強い人間になってしまう危険性がある。

一つには、女性の「老賢者」が未消化のままだと、父親の権力と自分を同一化したりして、他の男性を否定的な目でしか見られないといった事態になりやすい。さらに、現実の父親が否定的な「老賢者」の像を呈していると、その子どもである女性には好ましくない影響を与えることになる。たとえば、何度も再婚しても、アルコール依存やギャンブル狂、あるいは、暴力癖のある男性伴侶を選んでしまう女性がいるのである。このような場合、明らかに否定的な「老賢者」の犠牲者ということになる。つまり、「共依存」(co-dependency)【注③】という罠（わな）にはまってしまい、「世話を焼き行為」や「尻拭い行為」といった「イネーブリング」(enabling)に追われることになる。この問題を解消するためには、ここまで述べてきた事実を自覚して、「老賢者」の影響力から脱する努力が必要となる。

【注③】「共依存」(co-dependency)とは、不安や孤独感を解消するために、一方は極度に依存し、他方は必要以上に保護的になり、他者を支配しようとする人間関係の状態である。そのような関係を中毒的に繰り返す関係性の障害を言う。相互に憎み合い、怒りをもって相手を操縦しようとして分離が困難になる。

(3) 「老賢者」不在の現代

繰り返して述べるならば、智恵の象徴である「老賢者」はさまざまな物語の中で、主人公が困った時に、助言と助力を与えてくれる白ひげの老人として現れることがある。夢の中では、魔法使いや医者、聖職者、教師、祖父などの姿で現れる。つまり、自分の力ではどうすることもできない、

疲労困憊に陥ったり、もしくは絶望した状況下に出現して、知識・洞察・熟慮・智恵・賢明・直感をもたらすことにより、どうすればよいか、どうすればこの局面を開拓できるかを教えてくれるのである。それによって困難な状況から抜け出す糸口がつかめたりする。昔話や神話の教えるところによると、この助言に従えば成功を手に入れることができ、聞き入れなければ破滅するのである(von Franz, 1977)。

また、「老賢者」は親切心を持っており、良き助言や道具を与えてくれたりする。たとえば、塩椎神（しおつちのかみ）（記紀神話）は山幸彦に竜宮へ行く小舟を作り、井戸端の木の上にとまるように助言をしたことになっており、魔法使いマーリンはアーサー（Arthur）王を泉のある所へ連れて行って、聖剣エクスカリバー（Excalibur）を授けている。唐代の神仙小説の『杜子春伝』や芥川龍之介の小説『杜子春』の仙人も同様である。

さらに、「老賢者」は時に、断固たる信念、禁止、忠告を出すことがある。これらは父性に属するものであり、「老賢者」は父親像を背負っていることもある。たとえば、『スターウォーズージェダイの復讐』では、ヨーダがルークに、「ダークサイドに落ちてはならぬ」と言ったのは、まさしくヨーダの信念であり、禁止であり、忠告なのである。そして、時には試練を課す場合もあり、これも父性の為せる業なのである。その他の例として、中国の仙人や、『ユング自伝』に現れるフィレモン（Philemon）、中国の『真・女神転生（しん・めがみてんせい）』に出てくる太上老君（たいじょうろうくん：老子を神格化して呼ぶ称）、そして、ミヒャエル・エンデ（Michael Ende: 1929-95）の『モモ』に登場するマイスター・ホラなども同様に考えられる。

しかし、一方において、老人の知恵というものは、裏返せば狡知（わるがしこい才知）でもあり、魔法使いの魔法が悪用されることもまた多いもの

である。魔法使いとは、英語で“wizard”であり、古英語の「wis（賢い）、あるいは、wiz（賢い）+ -ard（過度に…の人）」となる。そして、人々に魔法（magic, witchcraft, sorcery）をかけ（put a person under a spell）たり、黒魔術（black art）と言われる邪悪な魔法や妖術を行ったりするのである。現代にはこの魔法が使えるかどうかは別として、公序良俗に反する魔術に似た違法行為を為す老人がいるものである。多くは魔術ならぬ詐術であるが、功成り名を遂げた高級官僚や政治家、あるいは、大学教授や○○博士、といった人たちが公金流用や収賄・贈賄の手練手段を弄している始末である。また、経験豊かな大学教授や学校教員、クラブの顧問といった人たちの万引き、淫行やセクシャルハラスメントもよくニュースで報道される。さらに、信心する心に取り入る悪徳宗教や似非修養法の教祖や伝道師の老人も多い。そして、相も変わらず巷には、ペテン師の如き占い師や呪い師、お祓い師や前世の因縁で脅す老教戒師がはびこっている。いわゆる、「カリスマ」（charisma）と呼ばれる人も、反面教師の如くであったり、軽薄であざとくなっている。これらの輩（やから）は、「老賢者」とは正反対の「老愚者」（old foolish man）とも呼ぶべき非道の達人たちなのである。老いてもなお私の唱える「木質心性」を醸し出すことができずに、哀れ我執（がしうう）の虜（とりこ）となったままの「プラスチック心性」の老醜なのである（鳥山、2008）。

『論語』によれば、「四十而不惑」と言われ「年齢40歳になればもう惑わない」域に達することである。孔子が唱えてすでに数千年を経ているので、時代の差は如何ともし難いのであるが、しかも、今や日本は世界でも有数の長寿社会であり、最新の統計によると、平均寿命は女性85.99歳、男性79.19歳と言われ、共に「不惑」の倍の長生き国民の社会である。「不惑」辺りでは到底平穏に悠々自適とはいかないのである。「不惑」の「不」を捩（もじ）って漢字を使い換えてみる

と、すべて「ふわく」と読むが、「夫惑」(夫が惑う、あるいは、妻が他の男に惑う),「巫惑」(似非宗教の巫女の言や占いごとに惑う),「怖惑」(怖がって惑う、不安神経症の増加),「負惑」(大きい負債に惑う、負け組になり惑う),「浮惑」(他の異性に心を移す浮気に惑う、射幸心に惑う),「婦惑」(妻たる女性が惑う、夫が他の女に惑う),「富惑」(宝くじなどが当たり巨富を得て惑う、富みを得たいと惑い不正を為す),「腐惑」(腐った根性で不善を行う、頭をなやます腐心で惑う),そして、「誣惑」(事実をいつわり人をあざむいて惑う、詐欺や談合や密室共謀に勤しむ),等々と、人間年を経ても惑いごとは数限りないのである。いわば、「壮愚者」(middle-aged foolish man and woman)とでも言うべき人たちが巷に溢れているのである。

それから、もう一つ悲しい統計数字がある。2007年の1年間に全国で「自殺」した人が前年比2.9%増の3万3093人となり、1998年以降10年連続3万人を上回ったそうである(警察庁のまとめ)。男女別では、男性が2万3478人、女性が9615人でいずれも前年より2.9%増えている。年代別では、60歳以上が1万2107人(前年比8.9%増)で2年連続で増加している。その他、前年を上回ったのは、40歳代の5096人(同1.8%増)、そして、30歳代の4767人(同6.0%増)であった。そのうち原因・動機を特定できた2万3209人では、健康問題が1万4684人で最も多く、経済・生活問題が7318人、家庭問題が3751人、そして、勤務問題が2207人と続いている。また、健康問題の内訳では、うつ病が6060人で最多だった。

このように、老いてもなお生き難く悲しく寂しい最後を余儀なくされる人たちが多くなっている。あるいは、独居老人やその孤老死も増えている。少なくとも「老賢者」の終焉の在りようとは思われない現象である。時代の流れや社会の勢いに取り残され、心ない若者の容赦のない無思慮な詐欺

の被害者になったり、IT革命に隨いて行けず昔ながらの素朴な生活道具に執着する老人たちも多い。「おばあちゃんの知恵」や「おじいちゃんの手仕事」の存在もいつの間にか影が薄くなってしまっている。学問も専門分野の知見も進化して、先達として長生きしてきた老人の博学多識も通用しなくなっている。当今は、かつて学んで得た知識や技術も古くなり、リカレントに学び直さねばならないのである。そのために、老人大学があり、生涯教育の場が用意されているのである。

老人たちも若者たちと学び合うなかで、お互いの心根や人生観を知ることができ、老人は文化の先頭を行く若者の行動様式や言語体系の移り行きを間近に捉えることができ、若者は老人から豊かな経験知や歴史の扱い手としての「語り部」像を得ることができるるのである。その意味で、米国で行われている「人生相談ネット」としてのサイト、「エルダー・ウイズダム・サークル」(Elder Wisdom Circle; EWC)という活動は、老人と若者の交流というまさに老若の対話が生き生きと為される契機になると思われる。いわば、「サイバー祖母と祖父」としての「おばあちゃん&おじいちゃんの知恵袋」がありがたがられているのである。それを利用する若者たちのために、一人でも多くの老人が現代の「老賢者」(old wise man and woman)として認められることがあるとうれしいことである。

このような状況にあって、「老賢者」といった人々を、今や、追慕することでしかその偉大さを知ることができない。その一人、故河合隼雄先生は最後の「老賢者」とみなされる大家であろう。上に述べたように、その先生と周辺の人たちとの交友録をひもときながら、今こそ先生の生前を偲(しの)ぶよすがとしたく思う。ユング同様、河合先生も「温故知新」を見据えて、「老賢者」の存在の重要性を唱えて、「太母」の危険性を警告されたのである。

3. 「太母」の時代

(1) 「元型」としての「太母」

現代にはもう眞の意味で「老賢者」と呼べる人はいないと思う。それはもう「天才」という傑出人が出なくなっているのと軌を一にしている。上にも述べたように、悲しいことに「老賢者」の「影」(shadow)として「老愚者」がぴったりとくっついているからである。一見「老賢者」と思(おぼ)しき人が、とある局面で「老愚者」を垣間見せるからである。そのような状況の中で、現代はむしろ「太母(たいぼ)」(グレート・マザー：great mother)が闊歩(かっぽ)する時代ではないかと考えるのである。

「太母」とは、温かく包み込むような優しさや、幼くて弱い者を力強く保護する母性的なものを表す「元型」で、大地の豊穣や生命の母胎といった大地母神を彷彿させる神話的なイメージを持っている。

しかし、他方において、「太母」には、この愛情豊かで慈悲深く、成長や豊穣を促していく「光」の側面だけではなくて、神秘的な威厳と不気味な暗黒をも内在させて、すべてを呑み込んでしまう「闇」の側面も併せ持っている。それは、「恐母」(terrible mother)とか、「呑み込みの母」(devouring mother)と呼ばれるものである。

したがって、「太母」の本質をただ一義的に、優しく暖かなものであるとのみ断定できない。つまり、「太母」は、優しくて穏やかな慈愛を降り注ぐのみならず、神秘的な深遠さと隠微な誘惑や破壊力をも兼ね備えた、奥行きの深い「元型」のイメージとして捉えなければならないのである。

このように、「太母」は「母親元型」として、「生み出すもの」、「慈しむもの」、「呑み込んでくれるもの」といった存在のイメージを意識に働きかける「元型」である。そして、無意識の中の母親像や自分の母親的な部分を表しているとも言える。特に男性は、この「太母」を通して「アニマ」

を形成して行くことになる。生命を育んでくれる大地に対して「母なる大地」と形容して、温かみやありがたさを感じるのはこの「太母」の「元型」の影響である。一方、「太母」には、「子どもを独占しようとする」、「束縛する」、「自分の子どもを呑み込んでしまう」といった暗い面があり、それが何らかの破壊的なイメージとなって、意識に働きかけてくる場合もある。たとえば、夢などには、肯定的なイメージとして、女神や聖母、觀音菩薩などとして現れて来たり、反対に、否定的なイメージとして、魔女や怪物などのイメージとして現れることもある。

(2) 「グレート・マザー」(great mother) の陰悪面

本来、「グレート・マザー」とは「大母神」のことであり、古代のフリギア(Phrygia)を中心として、小アジア全域で崇拜されていた「大地の女神」であると言われる。“Earth Mother”, “Mountain Mother”, “Idean Mother”, などとも呼ばれることがある。ギリシア・ローマでは、“Cybele(キュベレー)”の名で知られている。このキュベレーはフリギアの大地の女神であり、これが“The Great Mother”と呼ばれ、穀物の実りと多産を象徴しているのである。そして、“Earth Mother”とは、豊穣・万物の源としての「聖なる地母、地母神」のことである。その反対が、“Sky Father”としての「天父、上天神」であり、原初の父神である。

ところで、ギリシア神話には、アッティス(Attis)というフリギアの少年がいて、キュベレーに愛され夫でもあったのだが、その国の王女と結婚するという段階で、女神の妬(ねた)みによって狂人にされ自ら去勢して死んだ、という物語がある。これは神話の中の出来事であるが、過去にも現代にも、洋の東西を問わず、去勢という点で、よく類似した同様の事件が起こっているものである。これらは男児であることを嫌った母親による

ものであり、アッティスのように自ら切断したのではないが・・・。たとえば、2003年に、アメリカのマンハッタンで母親が自分の5人の息子の性器を切断して、犬に食わせるという事件が起こった。「息子たちが大きくなって、父親のような醜い男になるのが忍び難かった」と、母親は語ったそうである。また、我が国においても次のような事件があった。

【事件の概要】2004年3月、生後4ヶ月の男児の睾丸を母親がカミソリで抉（えぐ）り取るという事件が起きた。母親の名は田中光恵（仮名・当時24歳）。救急隊員には「ペットの犬に噛まれた」などと説明していたが、傷跡は明らかに刃物で切ったものであり、母親の犯行であると判断された。

虐待を受けた子の上に2歳の男児があり、いずれも婚姻外の出産であり、父親からの認知はされていない。また、父親もそれぞれ別人であるという。周囲には、「下の子は女の子」と語っていた。

調べに対して光恵は、「次男の父親からの連絡が途絶えて、カッとなつてやつた」「自分も義父から性的虐待を受けており、男性不信になつた」と、犯行の動機を語っている。検察側は、次男の父親に約束だった子どもの認知を断られたため、と指摘している。

犯行当時、光恵の家には4人の男性が入りしており、そのうちのひとりは次男の父親、また、ひとりは現在の交際相手、さらにひとりは彼女の義父であり、ほかにも恋人がいたという。

光恵の両親は彼女が5歳の時に離婚。母親に引き取られた光恵は、義父（母親の同棲相手）と弟との家族4人で暮らしていた。高校卒業後に看護学校に通うために家を離れ、伯母とふたりで暮らしていたが、それは義父の性的虐待を避けるためだったとも言われている。次男は、睾丸欠損により生殖機能は失われ、生涯にわたりホルモン注射による治療が必要だという。

2006年11月、地裁で懲役5年の判決が下りた（中村、2008）。

これは、女性の心に抱かれる菩薩が一転して、女夜叉となり鬼子母神に化した事実を物語っている事件と言えよう。母親の女性としての存在から、自らや他の女性に対して好ましくない行為者となる男性の否定的な側面への嫌悪感から、それを破壊するための男性の象徴への消去行為と言うことができる。

(3) 「グレートマザー」のような母の娘への嫉妬

次に、母親と娘との関係において、「嫉妬する母—芽を摘まれる娘」といった事例がある。「『鏡よ鏡、世界で一番美しいのは誰か？』と問いかけているのが、もともとは継母ではなく、実母であったことはよく知られている。グリム童話には、いくつも似たような設定がみられる。それほど、母は娘に嫉妬するものだと考えられていたということだ。童話と同じように、現代でも、母は美しさや若さといった娘のセクシュアリティの属性に対して嫉妬する。・・・近年では、彼女たちがセクシュアルな存在でいる時間は、途方もなく長くなっている。娘は、若く美しいはずの自分の位置を脅かす存在であり、そこに嫉妬が生まれる。

性的存在である娘を汚らわしいと考える母もある。ブラジャーをわざと購入しない、生理があつたことを無視するといった行動をとるのだ。当然、娘は初潮の経験を母には伝えられない。友人の母に打ち明けて、こっそり生理用品を買ってもらうのだ。カウンセリングで出会う女性たちの多くが、こういう経験をしているので驚いたのを憶えている。

娘は、女としてセクシュアルな存在であることに対する根深い嫌悪感（女性嫌悪）を、同性である親＝母から植え付けられるのだ。これは嫉妬というより、母自身が自らの女性性を呪つており、その投影と考えてもいいかもしれない。自分がそうであるように、女であることを呪うように娘を仕向けるのだ」（信田、2008）。

一方、注目すべきは、娘の社会的達成に対して

の嫉妬は、セクシュアリティに関するそれよりもっと頻繁にみられることである。

「ある女性は、忘れられないエピソードとして語った。小学校で算数の試験が92点だったので、先生にほめられた。それを家に帰って母に伝えたら『いい気になるんじゃないよ、算数の点くらいで』と一蹴されたという。喜びで一杯に膨らんだ風船を、一気につぶすような母の一言だった。その瞬間の天国から地獄に突き落とされたような感覚を、彼女は今でも憶えている。

このように、娘が人生で喜びを味わうたびに、丹念に一つずつつぶしているとしか思えない母がいる。彼女たちの多くは、戦後民主主義教育を受けて育ちながら、就職や進学では明らかな女性差別を経験した。そして、選択の余地なく専業主婦となり、夫の浮気や浪費、暴力などで苦しんだ母たちだ。彼女たちは、娘たちが昔とは比べものにならないほど広範に門戸を開いた大学にやすやすと進学し、一流企業に就職し、自己実現の階段を一步ずつ上がるたびに、激しく嫉妬する。自分と娘とは時代背景が違うということは十分承知のうえで、だからこそ陰湿な嫉妬の毒を撒き散らす。

娘が結婚すると、どこかほっとした顔をしたりする。『これで娘も世間並みの女の苦労をするだろう』という安堵感が、そこから読み取ることができる。妊娠したりすれば、もっと喜ばしいに違いない。世間からは、孫が生まれるので喜んでいると思われる所以に都合がいい。

『あなたを生んでどれほど私が苦労したか。やっと同じ苦労を味わう立場になったわね、いい? 女に生まれるということはこういうことなのよ』。口に出すなどという愚かなことは決してしないが、きっと母の顔は、自分の地平にまで降りるほかない娘を見ながら、ほくそ笑んでいるに違いない。

嫉妬する母は、嫉妬を自覚することはないだろう。なぜなら自覚したとたんに、それは娘に対して負けを認めたことになるからだ。嫉妬は、自らの劣位の自覚によって起きる感情である。だから

母たちは、仔細なひだの中に、日常の些事の中に、そっと毒針を仕込んで娘を刺す」(信田, 2008)。

この事例においては、母親たるもののがこれほどまでに自ら生み育てた娘に、いかに屈折した嫉妬を抱くものかと驚かされる。「外面似菩薩、内心如夜叉」と言うべきだろうか。

(4) 「グレート・マザー」のような母と娘の病

中村うさぎは、述べる。

松山優子さん(仮名、27歳)が「境界性パーソナリティ障害」と診断されたのは、20歳の時だった。「主な症状は、過食と不眠とめまいとりストカット。思い返せば、過食は小学生の頃から始ましたんです。自分でもわけがわかんないんですけど、ハンバーガーを10個くらい食べたりとか・・・」。「で、そんなことをしてるもんだから、当然、太っちゃったんです。1ヶ月で10キロも太ったんですが、親は成長期くらいに思ってて」。

厳しく行動を管理する反面、娘の様子の変化には驚くほど無関心・・・教育熱心といわれる親には、意外とこういうタイプが多い。勉強を強要し、少しでも成績が下がると敏感に反応するくせに、子どもが心を病んでいく過程で見せるSOS信号にはほとんど気づかなかったりするのだ。

あなたは、何に飢えてるの?欲しいものは、きっと別にあるんでしょ?それが手に入らないから・・・いや、手に入れることをとっくに諦めているから、あなたは食べずにはいられないんだよね?私には、わかる。私の買い物も、そうだったもん(注:著者の中村うさぎは、「買い物依存症」の経験があった)。

優子さんは、語る。「母は厳しい人でした。エリートでお嬢様育ちで、自分にできないことは何もないと思って育った人だから、当然、自分の娘も出来がいいはず、と信じてたんです」。

話を聞いているうちに、私は思った。これは、母親の方がパーソナリティ障害なのではないか、と。恐らく「自己愛性パーソナリティ障害」とい

うヤツだ。プライドが高く、絶対に非を認めたがらない。そのくせ、心の奥底では、自分に自信がなくて、弱くてダメな自分が今にも露呈してしまうのではないか、と、常に恐れている。そのピリピリした感じが周囲の人々に伝わり、緊張させる。特に子どもなどは、母親のそういう不安定さを敏感に察知するから、安心して甘えることができなくなってしまう。

「母は祖母と仲が悪かったんです。母が言うには、祖母は母の兄ばかりを可愛がり、母のことは苛（いじ）めてたんですって」。そうか。優子さんの母親もまた「母に愛されなかった娘」だったのだ。母から娘へ、さらに、そのまた娘へ、連綿と受け継がれていく「愛と憎悪の連鎖」・・・。優子さんの母親は、「加害者でありながら被害者」だったのである。本人も、さぞかしき生きづらい人生を送ってきたのではないだろうか（中村、2007）。

（5）「グレート・マザー」のような母にコントロールされた息子

さて、息子と母親との関係であるが、さすがに嫉妬というものは見られないが、自らの、あるいは、配偶者である夫の代理者として、出世や功名を得る期待を担わされ、母親が望む人生を強要され、そのままならなさに苦しみ、挫折して、時に母親に反抗するようである。私がカウンセリングのお相手をした事例に次のような3例があった（鳥山、2006）。

【事例1の概要】「大学入学の不本意感をひきずったまま8年で卒業」

X君は長男で、下に弟妹がいる。父親は不動産業を危なっかしくやっていたが、バブル崩壊後、負債を抱えて雲隠れしてしまった。行方不明ということになっているが、実は近県のとある町で、愛人と密かに暮らしているのだと言う。母親は仕方なくパートの仕事に出て生活費を稼ぎ、父親から送られて来るわずかな養育費とで子ども3人を

育てている。

まだ父親の仕事が順調な頃、X君は中学・高校と有名私立の進学校に学び、母親は、当然有名国立大学に息子は入学できるものと思っていた。しかし、X君は現役で第一志望校に不合格、一浪後も不合格となり、母親は息子に裏切られたという思いがつのり、とうとうX君を「ダメ人間」、「バカ息子」と呼ぶようになった。母親にとって希望の星であったX君であるが、二浪してでも第一志望の大学に受からなかった自分を、我ながら情けないとしつつ、連日の母親のいろいろした悪口雑言には閉口して、まったくやる気をなくしてしまった、ともらすのである。顔には表情がゆがむチック症状があった。

学業はともかく大学に出てきては後輩たちに「鉄道研究部」で大風呂敷を広げていた。非常に物知りで世間通で、ギャンブルとアルバイトはお手の物だった。卒業年限の最後にまで単位取得に波乱万丈のトラブルがあったが、何とか卒業してフリーターをしている。

【事例2の概要】「無気力、昼夜逆転の生活から立ち直るまでの15年」

Y君は中学・高校と理数科目が得意で、一度現役で中国地区のある国立大学工学部に合格して入学した。しかし、初めて親元を離れての下宿生活がうまくゆかず、昼夜逆転で授業に出られず、部屋中ごみだらけで、ふとんを敷いたままの万年床の下はかびがはえるといったありさまであった。たまたま訪ねて行った母親はびっくり仰天し、これではだめだと息子を即刻連れ帰り、一年次の途中で退学となった。

その後、予備校に通い受験勉強をやり直して、2年後に再び第一志望の国立大学を目指したが受験に失敗し、やむなく郷里にある国立の第二志望の理工系大学に入学した。

Y君の家庭は、会社員の父親とパート勤務の母親、4歳下に弟、そして、敷地内の別棟に父方

の祖父母といった構成である。父親は長男でまじめでおとなしく、親には従順で口答えひとつできない「よい息子」であった。職場結婚した当初から妻はそれが不満で、勝ち気で知性的な妻は、何かあればいつも姑と対立し、加勢してくれない夫の代わりに息子のY君を頼りにするようになった。

そのような家庭の状況の中で、幼児期には、Y君は夜尿の問題や、顔面が引きつるようなチック、そして、吃音（きつおん）といった症状が出るようになってしまった。母親は、姑の自分の子育てへの余計な干渉のせいだと思い、姑は母親の育児下手のせいだと母親を責めた。

地域の保健所の3歳児発達健診で情緒障害と診断され、Y君と母親は児童相談所に通うことになった。その後、問題も消失して、Y君は元気に幼稚園・小学校へと通うようになり、運動神経も優れていて、学業もなかなかのもので、クラスの人気者だった。中学・高校でも、学業は優秀でトップの位置、クラブ活動のサッカーもレギュラー選手だった。

母親の兄たち3人はいずれも国立の有名な総合大学を卒業し、それぞれ大学教授やエリート公務員や建築家になっている。母親は高校3年の時、父親が負債を残して急死したために、大学進学が果たせなかった憾（うら）みがある。そこでY君には兄たちにあやかり、一流大学を卒業して、功成り名を遂げてほしいと母親が願うのも無理からぬことだった。

しかし、Y君が入学した大学のレベルに、母親はまったく不満足であった。家において、母親の口の端々から漏れる嘆きや顔色に出る不機嫌に、Y君は辟易して学業に身が入らなくなつたのである。そして、10年目で退学、ニート（NEET）を5年、その間に障害児幼稚園で私の勧めでボランティア活動、そして、予備校で受験勉強をもう一度やり直して私立大学の福祉学科に入学した。現在、児童福祉施設で指導員として働いている。

【事例3の概要】『定時制コンプレックス』を託（かこ）つ中年

これは私が勤務していた大学の関係者の知人で縁故者の相談を依頼されて、出会った人である。ある日、年老いた母親同伴で45歳の男性が相談室にやって来た。Zさんは、見るからに元気がなく、ただ「定時制さえ出てへんかったらなあ・・・」とうわごとのように繰り返すのだった。母親の語るところによると「もう30年も前のことであるが、息子は公立高校の受験に失敗した。息子はもう一つ私学の高校は合格していて、そこへ入学したいと言った。しかし、当時私学のレベルは低く、あまり評判のよくない高校だったので、その後、定時制を受験させ、合格したので、伝統のある名門校の定時制に入学させた。

Zさんは、その高校を無事卒業し、そぞこの私立大学に合格し、卒業して中堅の企業に就職した。そして、先年小さな町工場を経営していた父親が亡くなり、後継者を選ぶことになった。その工場で長く勤めていた姉の夫（つまり、義兄）が社長に就任した。そこで、父親の実の息子の直系であるZさんこそ後継者になるべきだと思っていたのに、そうならなかったのは、自分が定時制高校卒業という学歴だからだろうと、Zさんは思い込んだのである。それでそうさせた母親を恨み、離れた所に住む母親に電話をしきりに掛けては、「なぜ、俺を定時制なんかに行かせたんや？」と詰問したそうである。その後も老いた母親を責める言動が繰り返されたので、精神科医に紹介して投薬をしてもらった。自殺企図もあったが、失業してほぼ2年後に落ち着かれて再就職された。

これらの3事例に共通するものと言えば、母親の意を汲んで進学を目指したもののが果たせず、いつまでも不如意感を抱いたまま、満たされない心のままに上に述べた「負惑（ふわく）」に落ち込んだ姿と言えよう。いわば母親の強いコントロールに従い、信田（2008）の言う「条件つきの愛」に縛られ、「愛という名の支配」を受けた犠牲者

たちである。

(6) 「グレート・マザー」：母として女として

現代は「教育の機会均等」風潮以上に女性の高学歴化と社会における「男女共同参画」が進んでいる。自らの人生を企画して、自己実現を果たしたいという女性たちの希望や欲望や野望は、男性たちをたじたじとさせている。もちろん、男女ともに適者生存であり、社会淘汰の憂き目に会うことは仕方のことである。その熾烈な生存競争に巻き込まれ、あまりにも利己主義、私事主義に陥って、他者への配慮が疎（おろそ）かになる社会化不全の輩が増えつつあるのである。それが「壯愚者」であり、「恐母」・「呑み込みの母（呑母；どんぱ）」・「貪りの母（貪母；どんぱ）」といった「グレート・マザー」なのである。我が子であるのに幼児・児童虐待をする母親、進学やお稽古ごとに強制や過剰な支配をする母親、実際には子どもを生み育ててはいないとしても相手を強烈に籠絡（ろうらく；丸め込み）して金縛りにする「ゴッドマザー」（godmother）のような女性政治家、いかさま占い師、小説家、大学教員、そして、女優やタレントたちが、何と臆面もなく跋扈（ばっこ）しているのだろうか！彼女たちは、「悪女」とは言えないとしても、「怪女」であり「魔女」であり「烈女」であるといった形容が可能な、敢えて意識的に事を為す確信犯的な女性たちであると言えよう。俗なことであるが、思いつく限りの例を挙げると、古くはクレオパトラ、北条政子、春日の局、西太后、等々、といった女性たちがそれに当たるであろうか。名もない女性たちの中にも、多かれ少なかれ、奸計を弄し、妖気を漂わせ、自己顕示性欲求が強く、自己愛性人格障害傾向の強（こわ）い面々が、マスコミや社会面の番組や

ニュースに登場する昨今である。それゆえに、「老賢者」の割り込む隙がなく、青壯年の男性たちは尻込みして、肩身を狭くして逼塞（ひっそく）しているのである。「グレート・マザー」の支配する時代の行く末はどのようになるのであろうか、じっくりと見つめることが必要である。

引用・参考文献

- Hannah, B. 1976 Jung: His Life and Work. A Biographical Memoir. A Perigee Book: G. P. Putnam's Sons, New York. (後藤佳珠・鳥山平三訳 1987 ユング評伝—その生涯と業績—I・II 人文書院)
- Harding, M. Esther 1963 Psychic Energy, Its Source and Its Transformation. Princeton University Press. (織田尚生・鳥山平三訳 1986 心的エネルギーその源泉（上巻）と変容（下巻）— 人文書院)
- Jung, Emma 1947 Ein Beitrag zum Problem des Animus. Psychologische Abhandlungen IV., 1955 Die Anima Als Naturwesen. In: Studien zur Analytischen Psychologie C. G. Jungs. Rascher, Zuerich (笠原 嘉・吉本千鶴子訳 1976 内なる異性—アニムスとアニマー 海鳴社)
- 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館
- 中村うさぎ 2007 鏡の告白 講談社
- 中村うさぎ 2008 女という病 新潮文庫
- 信田さよ子 2008 母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き— 春秋社
- 鳥山平三 2006 キャンパスのカウンセリング—相談事例から見た現代の青年期心性と壮年期心性— 風間書房
- 鳥山平三 2008 コミュニティの変容と臨床心理—都会における人間模様に光を灯す社会臨床心理学— 風間書房
- von Franz, Marie = Louise 1977 Individuation in Fairytales. (後藤佳珠・鳥山平三訳 1990 おとぎ話と個性化—鳥をめぐるモティーフ 人文書院)

OLD WISE MAN AND GREAT MOTHER IN JUGIAN ANALYTICAL PSYCHOLOGY : MOURNING THE DEATH OF DR. HAYAO KAWAI

Osaka Shoin Women's University
Heizou TORIYAMA

ABSTRACT

I would like to give a memorial address for Dr. Hayao Kawai's Soul. For I studied the analytical psychology under Dr. Kawai. I think, he was one of the last "old wise men" in the 20th century in Japan. Jung's analytical psychology puts emphasis on so-called various archetypes. Here, remembering the circle of Dr. Kawai's acquaintance, on this essay I discussed either recognizing the existence of the "old wise man" or not in our time. On the contrary the negative side of the "great mother" makes her influence felt in the world. It is a pity that there are many women who live by her beliefs, therefore there are many wicked, greedy, and invasive women. It is to be desired that many "old wise men and women" come to life again.

Keywords: Dr. Hayao Kawai, Jung's analytical psychology, archetype, old wise man, great mother.